

いざ漢字を教えてみると、本当に覚えたかどうかはどうしても気になります。いくら脳を活発化させるとはいっても、どこまでわかったのか、親は気になるものです。

まだ言葉の発音が完全にできない時期でも、親が「目」という漢字を示せば赤ちゃんは目に手をやるようになります。「耳」を示せば耳を触るでしょう。

こういうことをするようになれば、その漢字の意味は理解できたと言えます。しかし、それが漢字教育の目的ではありません。漢字で脳を活性化するのが目的です。頭を使うことが頭を良くすることなのですから、どの漢字がわかってどの漢字がわからなかったということは、あまり神経質になる必要はないのです。

教える漢字の数にしても、言葉がしゃべれない幼児のうちには、あまり数を増やさなくてもいいのです。」実際に言葉が発せられるようになったら、子どもの反応を確かめながら、数を増やしていけばいいのです。

言葉がしゃべれるようになってくると、幼児は知識欲が旺盛になってきます。

「これ、なあに？」と質問を矢のように投げかけてきます。

この質問にはきちんと答えてやりましょう。忙しいから、とこれをおろそかにすると、幼児は質問をしないようになります。

ただし、勘違いしてはいけないのは、幼児が欲しないことはそのままにしておくことです。知りたくないときに無理やり教え込めば、これは消化不良になって逆効果です。子どもの欲することにだけに答える、ということをお母さんはとくに認識しておいたほうがよいでしょう。